

## 42 徳川昭武公の『順天堂入院日誌』

について（第一報）

中西 淳朗

千葉県松戸市の戸定（とじょう）歴史館に所蔵されている徳川昭武公直筆の『順天堂入院日誌』を拝見させていただき研究の機会を与えられたので茲に概説を試みる。

徳川昭武公の『順天堂入院日誌』は、明治四十一年二月二日の入院から同年三月三十一日の退院までの記録で、縦二十四センチ、横三十八センチの美濃紙に、小梅徳川家と印刷された罫紙二十七枚に筆で書かれている。用紙を二折して表紙には朱で花押を入れ、紙コヨリで綴じている。

内容は、まず入院までの経過が前書きとして記され、本文は二月二日から書きはじめている。

〃 二月二日 晴

午後一時過発邸、順天堂医院ニ入り階下才十七号ヲ居室、同十六号ヲ附添人控室トナス、本日ハ根本進隨從セリ〃  
二月三日以降は、天気その他、容体、診察、処法、来客、記事に区分して記されている。

ただし、手術をうけた三月四日の内容は、家令と思われる福原氏が医師からの聞き書きを作り、後に記入したものと考えられる。

この『入院日誌』の内容については、すでに須見 裕氏が中公新書の『徳川昭武——万博殿様一代記』に略記しているが、須見氏に少々思いちがいが認められるので、コメントを加えておく。

第一に、須見氏は「日記」と書いているが、「日誌」に統一したい。第二に、攝護腺（前立腺）の腫脹にもとづく血尿で入院したのに、途中で特発性腎出血と診断が変わり、右腎臓剝手術後は腎盂の乳嘴腫症と変わったことから、この診断は、現在では違った診方になるかも知れない〃と書いている。この意見は昭武公の孫娘の夫・徳川博武氏（昭和十一年慶医卒、病理学を専攻した内科医・昭和六十一年死去）の考え方に従ったものと思われ、ちよつと歯切れが

悪い。

入院カルテが関東大震災で焼失しているので、この『入院日誌』から思推してみると次の如くである。

今日いうところの前立腺肥大症では、急激な腫大による粘膜からの出血（肉眼的血尿）を初発症状とする例が稀だが存在する。従つて、昭武公の場合、入院当初から前立腺にこだわり過ぎた様である。また、臨床的に「特発性」という時は原因が良くわからないという意味で用いるので、別立標本で乳嘴腫症と病名が變つても、レントゲン線検査法の未発達な時代では当然である。

主治医の阿久津三郎は、日本の泌尿器外科の草分けで、明治三十九年まで（順天堂医院に迎えられるまで）に二十例の腎臓別手術を行つており、当時では驚異に値する例数であつた。患者は全国から集つたという。

昭武公は、順天堂医院の医員諸氏殊に阿久津医師に深謝して退院した。公は大の写真好きであつたので、術後第十四日から退院までの十日間に、看護婦、副婦長、院内風景、阿久津医師など九枚の写真を撮っている。

腎盂の乳嘴腫症は、現代では乳頭腫症と呼び、上部尿路の多発性移行上皮癌とされている。タバコも好まれた昭武公の初診時の一般全身状態は、日本癌治療学会基準ではグレードⅠ（軽度の症状があるが、歩行や坐業はできる）で、手術時の臨床病期は、日本泌尿器科学会並に日本病理学会編の「腎盂・尿管癌取扱い規約・平成二年」に従うと、ステージⅡ以上（リンパ節や遠隔臓器への転移は不明確だが、癌細胞は粘膜下から筋層に達している——手術時間四十分からの推定）と考えられる。佐藤佐副院長が執筆した二年後の「御容態書」ら類推すると、公の死因は、肺転移に併発した気管支肺炎となろう。前立腺肥大症は無症候期のものにすぎなかつたと考える。徳川昭武公は臨床上非常に稀な癌で死去された。享年五十六歳であつた。

（横浜市・中西医院）